

【やや黄色い熱をおびた旅人】

9

螢が

1997年7月

プノンペン

(カンボジア)

原田宗典

昼食が終わると、私とM君は手製の物見台にのぼった。

四階建てのビルの屋上、といった高さだろうか。てっぺんまでのぼると、好い風が吹いていた。

三百六十度、見渡すかぎり泥の平野だ。霧雨が遠景を隠しているが、時折強い風が吹いて、霧のカーテンをしばらく開けてくれる。

「あそこです。山、見えるでしょう?」

M君はそう言って、遠くを指さした。目を凝らすと、本当に遙か彼方に、山らしき姿がぼんやり見える。山というか、丘と呼んだ方が相応しく思われる。

「あの山に登って、上から地雷を撒くんですよ」

「山の上から?」

「ええ。乾季にね。あの山まで行って、地雷をばら撒くんですよ。これが浮遊地雷という厄介な代物で……水に浮くんです。だから山に撒いておけば、雨季になると勝手に水に流されて、国中を移動するんです。で、春になって、草が生えれば、もうどこにあるか分からない」

「それは……厄介だな」

「厄介ですよ。いくら地雷除去やつても、次の雨季になったら、また分からなくなる——その繰り返しなんですからね。だからその水が入ってくるのを防ぐために、ああして高い堤を築いているわけです」

M君が見下ろす先には、六メートル近い堤を築いた内側に十数反の田んぼがある。

「動き回る地雷か……」

愚かだ。愚かすぎる。山で撒いた地雷を、巡り巡って自分が踏むことになるかもしれない、とは考えないのだろうか。M君の話では、今でこそ収まっているが、ついこの間までは、いろんな派の兵隊たちが入れ代わり立ち代わり山へ行つては、大量の浮遊地雷を撒いていたのだという。今なおカンボジア国内に潜んでいる地雷の総数は、数百万個とも数千万個とも言われている——ようするに分からないのだ。雨季になる度に移動を繰り返す地雷を数える方法など、あるはずもない。

「あそこは？」

私は堤を挟んで田んぼの反対側に位置する原っぱを指さした。敷地の中央あたりに、泥まみれのシヨベルカーらしき土木機械が停まっている。

「あそこは、まだ地雷除去が済んでない土地です。真ん中に停まっているのが、地雷除去用の特殊なシヨベルカーです。うちの親父が設計したものです」

「親父さん、エンジニアだったね」

「土木作業機械の設計家です」

「そうか。あの地雷除去用のシヨベルカーっていうのは、どういう仕組みなの？」

「あのアームの先端についてるのは、ただのシヨベルじゃなくて、地雷破碎装置を内蔵しているんです。細かいことは分からないけど、とにかくこう、土を一掬いするでしょう——そうするとシヨベルの中が高速で回転するミキサーみたいになっていて、地雷を巻き込んだとしても

爆発するよりも早く粉碎してしまう。土も耕せるから、一石二鳥だつて言つて、親父は自慢してます」

「なるほど」

見下ろすと、車一台がやつと通れるほどの幅の堤の上を、東の方から軍用ジープと泥まみれのメルセデスが走ってくる。縦目の古いメルセデスだ。二台の車は危なっかしくうねうね蛇行しながら走ってきて、この地雷除去プロジェクトの施設の正面ゲートで停まった。機関銃を携えた二名の兵士が、敬礼をして、車を通した。

「お偉いさんのご到着だ」

M君はそう言つて、物見台から下りていった。私も訳がわからないまま、後に続いた。

メルセデスからはでっぷり太った、五十がらみの偉そうな軍人が降りてきた。軍服の胸から腹のあたりまで、無数の勲章をつけている。一目見て、私は嫌悪感を覚えた。こういう奴が、何の考えもなしに地雷を撒いておけと命令したのに違いないのだ。M君が言うには、その男はフン・セン第二首相側の有力者で、今回は表敬訪問に訪れたのだという。

「スポンサーだからよォ、無下にも断れねえんだわ」

寄ってきた父M氏が大声で言う。私は不本意ながらも勲章男と握手を交わし、テレビ・クルーたちも集まってきた、記念写真を何枚か撮った。勲章男は噛み煙草を噛んでいて、口の中が真黒で、猛烈な口臭だった。

写真を撮り終えると、彼らはすぐに車に乗り込んで、猛スピードで去っていった。あまりの慌ただしさに、まるで白昼夢を見たかのような思

いだった。

「ゲートに二人歩哨が立ってますけど、狙われることってあるんですか？」

私は父M氏に尋ねた。

「んー、まあないこともないんだ。こないだ小ぜりあいがあったばかりだしなあ」

「それは、第一首相側の兵士が襲ってくるんですか？」

「そうだよ。まだ残党がけっこういるんだな」

父M氏は何でもないことのようにそう言っ、現地語で大声を上げた。「昼食終わり」か「作業開始」と言ったのだろう。その声に応じて、休憩していた現地人の人足たちが、どっこらしよと動き始める。そのほ



とんどは田んぼの方へ向かう——田植えなのだ。

私はM君と肩を並べて歩き出し、父M氏の後に従った。彼は泥道を大股で歩き、堤の上から田んぼとは反対側の原っぱに下りた。そして自分が設計した地雷除去シヨベルカーの方へ歩いて行って、振り返るところを言った。

「動かしてみつか？」

それは、私の後ろから歩いてくる撮影クルーに向かっての問いかけだった。

「お願いします！」

ディレクターのK君が大声で応える。カメラはもう大分前から回しているらしい。父M氏はそれに応えて地雷除去シヨベルカーに乗り込んだ。

小太りだが、実に身軽だ。

ひと間あって、エンジンが唸りを上げる。この轟音は、大型トラックなどと変わりない。ただ違うのは、アームの先についたシヨベルの中からも、高速で何かが回転する音が響いてくる点だ。父M氏はまだ除去の済んでいない草原に向けて、シヨベルカーを走らせた。運転台の彼は、どこか得意そうな、嬉しげな顔をしている。

「好きなんですよ、あの人」

M君がそう言って、苦笑いを浮かべる。機械のこととなると、設計も組み立ても操縦も大好きで、人にやらせないのだそうだ。

おそらく機械だけではあるまい。父M氏という人は、何でも人まかせにはできない性分なのだ。だからこそ今ここで、こんなことをやってい

るのだ。こんな果てしもないことを。

シヨベルカーはアームを伸ばし、遠くの草むらに切っ先を突き立て、豪快に土を搔く。土はシヨベルの中で粉々に碎かれ、元の場所に撒き散らされる。その繰り返しだ。どうやらアームの届く範囲を半円状に耕しているらしい。そうやって同位置で搔けるだけ搔くと、シヨベルカーを前進させて、また新しい場所を耕すのだ。

撮影クルーは近くまで寄っていったが、私とM君は少し離れた場所から父M氏の勇姿を眺めていた。

「今は、あれ一台？」

「プノンペン郊外で三台、稼働しています」

「たった三台……」

「あれ、一台二千万くらいかかるんですよ。日本の企業とか国連とか、あちこちはたらきかけたんだけど、親父、あの調子でしょう？　出資者がなかなか見つからなくて、大変だったみたいですよ」

「結局、どこが出したの？」

「フン・セン第二首相ですよ。親父が直談判にいった、直接交渉したんです」

私は先程会った勲章男の偉そうな姿を思い出し、嫌な気分を味わった。あんな奴に頭を下げなければならぬのは、父M氏にとって屈辱だったろう——いや、そう思うのは平和ボケした私だけで、案外平ちゃらだったかもしれない。

やがてシヨベルカーの轟音が止まり、父M氏がたった今耕したばかり

の土を堂々と踏みしめて、こちらに歩いてくる。鼻息が荒く、やや興奮している様子だ。

「田植え、やってみつか？」

傍らを通り過ぎながら、父M氏が言う。私とM君はその後に従った。堤を上ってその上から見渡すと、鈍色の空の下に十数反の田んぼが広がっていた。畦で区切られた水面が、曇天を映している。

「ここ、この田んぼでやってみ」

父M氏は手近の田んぼの畔に立つと、何でもないことのようにそう言った。

「いや……やってみと言われても……」

「靴脱いで、靴下脱いで、ズボンも脱いで、裸足で田んぼの中さ入っ

てみれ」

私は言われるままにTシャツにパンツ一丁の姿で、おそるおそる田んぼに入ってみた。

ぬぷッ……。

足の裏で、泥がくねって変な音を立てた。泥の中に何か生き物がいて、そいつがくねったようにも感じられた。その感覚をくすぐったく感じながら数歩、泥の中を行く。と、不意に湧き上がってくるのが、

「地雷は？」

本当に大丈夫なんだろうな、という思いである。しかしその思いはすぐに、父M氏の言葉によって粉碎された。

「苗！ 苗だ苗だ！ 苗持ってかねえで、何を植える気だあ？」

「あ、そうか」

私は何も考えずに十数歩戻り、父M氏から稲の苗を十株くらい手渡された。それは濡れて、すでに泥だらけだった。

「そのまままっすぐ！」

振り返ると、田んぼの中に短パン姿のM君が突っ立っている。

「こっちです。こっち」

手招きされるままに、泥の中をぬぶぬぶ進む。と、そこまで田植えが済んでいる区画の端っこに私はいた。

「苗はですね……こう持って、こう、ですね」

「こう持って……こう？」

「いや、こうです」

「こう？ あれ、だめだなあ……」

何度やっても、私の植えた苗は、泥の中にとどまらず、ぷかぷか浮いてきてしまう。

十数株のうち、ちゃんと根付いたのは、わずか三株にすぎなかった。何しろ土がゆるいのだ。土というか、水分の多い泥である。そこへ「糠に釘」どころではないゆるゆるの土壤に、苗を突き刺す——刺さるわけがない。苗は一瞬、気をつけをしているように見えて、次第に足元を失って、ゆっくりと倒れていくのだ。十秒くらいの時間をかけて、苗はゆっくりと倒れ、水面にぷかぷか浮いてくる。隣りで見ているM君が、そのたびに苗を植えなおす。彼がやると、不思議とこれがちゃんと自立するのである。



「まいりました」

私は両手を上げて、父M氏のもとへ歩いていった。

「農業の才能、ゼロだべ？」

父M氏は豪快に笑った。私もM君もつられて笑いながら、田んぼから上がった。汗びっしょりだった。

靴を持って、足を洗える水場まで移動する途中で、父M氏はこんなことを尋ねてきた。

「あんたよ、有史はじまって以来、日本人は何回米を作ってきたと思う？」

「え？ 有史以来……」

「たったの二千回だよ！」

「え?」

「一年に一回しか収穫できねえんだから、二千年で、二千回だ。人が一生懸命生きてても、百回は収穫できねえ。それくらい貴重なもんなんだよ、米はよ」

私は意表を突かれて、言葉を失った。なるほど、確かにその通りだ——私はあまりにも単純で根本的なことを忘れていた。近すぎて無視あるいは見過ごしてしまう——私の悪い癖だ。

簡易な井戸を掘った水場で足を洗いながら、私は大いに反省した。

それにしてもまあ何という父子だろう。息子は来春自衛隊に入隊予定で、PKOに参加して、紛争地に派遣されることを希望している。一方父親は、もと国連の職員で、紛争地を回らされた——現場主義なのであ

る。ちなみにM君は、紛争まったただ中のソマリアで生まれたという。父M氏は「こっちは食料が必要なのに、医療品や毛布を送ってくるんだから、話になんねえよ」と啖呵を切って、国連を辞めたらしい。その後は、自腹を切ってまで、この地雷除去の作業に情熱を燃やしている。

私は正直、どちらの考えも理解できなかった。もし自分が相手だったら……と想像してみても、具体的なイメージは湧いてこないのだ。

日が落ちる前に私たちは支度を整えて、車に乗り込んだ。父M氏の運転する4WDにM君と私。撮影スタッフたちは、マイクロバスである。

助手席に乗り込んできたM君が、自動小銃を手にしているのを見て、後部座席の私はぎょっとした。もちろん安全装置はかけてあるのだろう

が、それは武器独特の危ない気配を放っていた。怖かったので、私はおどけて言った。

「物騒だなあ。そんなもの、使うことあるの？」

「いや、時間帯がね……」

M君は真面目な顔で答えて、父M氏と視線を合わせた。

「暗くなる直前っていうのは、危ないんです」

「堤のかけから、ズドンってか」

父M氏は威勢よく笑った。そしてルームミラーで後ろのマイクロバスを見ながら、

「あいつら大丈夫かな……よし、行くぞ」

4WDを発進させた。

堤の上を走る道は、道とは呼べない代物だった。平らな部分はほとんどなく、どこもかしこもデコボコである。あちこちにそれこそ地雷が爆発した跡のような大穴が開いていて、そこに泥が溜まっている。まるで罨だ。

父M氏はその罨の位置を熟知しているらしく、右に左にハンドルをさばいて、道なき道を行く。車内はドラム式洗濯機の中みたいな状態だ。道理で運転前に父M氏もM君もシートベルトをしていたわけだ……私もあわててシートベルトをかちやりと嵌めた。それでも三回、サイドウインドに側頭部をいやというほどぶつけた。

道が、あざ笑っているような気がした。

そんな道を五百メートルも進んだところで、父M氏は4WDを停めた。

そこは少しだけ高い道なのだろう。路面がしっかりしている。右手に大木が三本かたまって生えている。

その木の根本には、人が暮らしているらしい。4WDが停まったのを見て、はじめに集まってきたのは、子供たち六、七人だった。彼らはほとんど裸だった。Tシャツだけ着てる子、パンツだけはいている子、何も着てない子。もちろん全員、裸足だ。中に一人、手製の松葉杖らしき木の枝をついた片足の少年がいた。彼の右足は、膝から下がなかった。

「あああ、やっぱり引っかかりやがった！」

父M氏は振り返り、五十メートルほど後方でマイクロバスが立ち往生しているのを確かめると、

「おれ、行ってくっから。おめえ、手サ足りなかつたら呼ぶからよ」

と言いついて、車から出ていった。

遠ざかっていくその後姿を見て、何人かの子供が、くすくす笑っている。片足の少年も笑っている。

「あれは……彼らはあそこで暮らしてるの?」

私は尋ねた。M君は自動小銃を手にしたまま、身体をひねって駆けてゆく父親の後姿を見つめていたのだが、前に向いて座り直してから答えた。

「そうですよ。木の下で暮らしてるんです。木の幹にこう、木の葉のついた枝を立てかけてるでしょう? あれ屋根で、あれ家なんです」

「家? あの三角形のスペースが?」

「並んで体育座りで座って生活してるんです」

「あの葉っぱの屋根の中で……」

「大雨が降って、水がくると、みんな木の上にのぼって逃げるんですよ。彼らにとって『家』っていうのは、どうせ流されてなくなってしまうものなんですよ」

「木にのぼって……あの木の幹より上まで水がくるの？」

「来ますね。でも、木にのぼって逃げるのは人間だけじゃないんですよね。コブラとかムカデとか、そういうのに咬まれて木の上で死ぬ人も多いんですよ」

「何という壮絶な死に様だろう。逃げ場を失って木にのぼってくるコブラやムカデは一匹や二匹でないことは、たやすく想像できる。」

「煙草吸ってもいい？」



渴いた声で私は尋ねた。

「いや、まあいいですけど……ぼくなら、屈んで吸うけどな」

「いいんだ。吸いたくなくなったから」

私は首をすくめ、身を低くして答えた。

夜は、刻々と近づいていた。秒刻みで、風景は闇に沈んでいく。

「遅いな……すみません、おれも行ってきましたから、ここ頼みます」

やがてしびれを切らせたM君がそう言って、車から出ていった。助手席を見ると、自動小銃が置いてある。銃口を上に向けて、シートに立かけてある。私は身を乗り出して、自動小銃の部分部分を間近に観察した。銃口、銃身、引き金、銃底。多分、カラシニコフだろう。銃身に刻んである文字が何となくロシア語っぽい。

アメリカの自動小銃は何て言うんだっけ？　MKなんかだっけ？

後部座席の私は身を低くして、そんなことを考えていた。

やがて前方の木の根本で、焚き火が始まった。子供たちはもとより、体育座りの家の中からも大人たちが続々と現れる。晩飯だろうか？　何かを調理するのもかもしれない。それをしばらく眺めてから、ふと背景に目をやると、辺りはすっかり暗くなっていた。

サイドウインドの闇の彼方に目を凝らした私は、思わず、

「ああ！」

と叫んでしまった。

闇の中に、数千いや数万の螢がいて、そこらじゅうで明滅していた。

すごい数の螢だ。目にするのと同時に、私はぞっとした。美しいとは思

わなかった。むしろ怖かった。虫でも何でも、小さい生き物が夥しく群れている様子は、気持悪くて、怖い。

そこへ背後から二人ぶんの足音が近づいてきた。運転席と助手席のドアがほとんど同時に開けられ、父M氏とM君が乗り込んでくる。二人は物も言わずにシートベルトをして、エンジンをかけた。

「どうかしましたか?」

助手席のM君が、青ざめて黙っている私を気遣って、尋ねてきた。私は、たった今見た螢の群れについて、話そうと思ったが、それは無理だった。

「螢が……」

私は大分黙っておいてから、呟くようにそう言った。しかしその声は

発進した4WDのエンジン音にかき消されてしまった。